『佐久間象山の生涯に関する考察』

7017321 　藤井　麟太郎

序論

　その開明的な思想と持ち前の行動力で、幕末期における動乱の日本に進むべき道を示した稀有な思想家、佐久間象山（1811　一八一一-一八六四）。佐久間象山の先見性は時代的な限界もあり、必ずしも全ての建言が受容されたわけではなかったが、実践を重視した彼の思想は勝海舟・坂本龍馬・加藤弘之といった名だたる後進に引き継がれ、幕末期および黎明期の明治日本に多大な影響をもたらしている。

　象山の思想は彼の著作『省**諐**録』（佐久間象山、岩波書店、一九四四年）に登場する「東洋道徳・西洋芸術」というスローガンに象徴され、東洋思想に精神面での正当性や学問の実践を求める朱子学者としてのバックボーンからの影響が見られる一方で、科学技術の水準において、当時日本よりも明らかに進んでいた西洋の芸術（技術の意）を自覚的に摂取することの重要性を説いている。

尤も、開国論を一早く説いた象山だが、当初から外国技術の摂取の重要性を認識していたわけではない。そもそも象山は、松代藩士である父・佐久間一学国善の元に長男として生まれ、学問に造詣の深かった父から四書五経を学んだ。その後十六歳の時に、地元である松代藩の家老、鎌原桐山に入門して以来は本格的に儒学を学び、江戸遊学以降は鎌原桐山の師匠で当時の日本を代表する儒学者であった佐藤一斎について学んだから、バックグラウンドとしては生粋の儒学者である。

その彼が西洋の学問に目覚めたのは、松代藩主であった真田幸貫が幕府に老中として抜擢されたことが契機だった。かねてから秀才として目をかけられていた象山に、海岸防禦御用掛としての命が下され、藩主とともに江戸に登ることになった。東シナ海を挟んだ隣国・中国、すなわち当時の清国がアヘン戦争でイギリスに惨敗した直後の出来事とあって、清国の敗北を対岸の火事として見過ごすわけにいかない幕府が海岸防御の重要性を強く認識し始めていたタイミングであった。海岸防御御用掛に任じられたのに伴い、象山は伊豆韮山の江川太郎左衛門に入門し、砲術などを学んでいる。象山からの入門依頼を受ける直前に、師である高島秋帆が疑獄事件に遭っている江川太郎左衛門は、当初は人との関わりを拒んで象山の入門を渋っていたものの、結果的に入門を許可した。結局江川太郎左衛門とは反りが合わず江川塾を後にする象山だったが、洋式砲術など学ぶところは大きく、この時期に『海防八策』として海防論にまつわる意見書をまとめ、藩主真田幸貫宛に上申している。基本的な内容としては、当時禁止されていた大船の製造を解禁し、オランダから技術者を招いて戦艦を作ること、その費用を調達するために、頻発していた船の難破を防止すべく、全国に船役場を設けること、他にも能力主義の採用など画期的な内容であった。この『海防八策』の更なる内容に関しては本論二章で詳しく論じたい。

その後も、著名な蘭方医であった黒川良安についてオランダ語を驚異的なスピードで習得する。この期間の睡眠時間は一日わずか二時間であったという。身につけた語学力を用いて原典に当たることで孫氏のいう「彼を知り己を知る」を実践する象山だったが、複数の史料より伺える通り、彼の開国論がいわゆる攘夷論の対極にあたる友好的な開国論にあたるものではなく、強硬的な外国に対峙するために技術を摂取する必要があるという積極的な開国論であることは注意したい。前述の『省**諐**録』をはじめとした複数の文献の中でも、日本に対して高圧的な態度で接するアメリカに対する不快感をあらわにしていることを窺い知ることができる。

他にも象山は外国技術摂取の更なる効率化のためにオランダ語辞書の編纂許可を老中に伺っているが、これは時代的な限界があり拒否されている。ただし、そうしたタイミングでペリーが来航し、象山のかねてよりの警鐘が現実化したことを受け、勘定奉行の川路聖謨などは彼の先見性を高く評し交流するようになっている。

　オランダ語辞書の編纂は幕府から許可が下りなかったものの、江戸における象山の砲術家としての名声は高まっており、彼について学びたい者が増えてきていたため江戸に五月塾を開講し洋学を教授することにした。ちなみに、この五月塾には坂本龍馬、吉田松陰、加藤弘之、勝海舟といった後の日本を担うことになる人材が多数入塾した。

　さて、五月塾の開講は一八五〇年のことであったが、この三年後、ペリーが浦賀に来航する。日米和親条約の条約案に下田開港の文言を見つけた象山は、関係者から聞いた情報を併せて考えた結果、その地の担当者である江川太郎左衛門からの発案であろうと判断し、その案の愚鈍さを手厳しく批判しつつ、代替案としての横浜開港案を彼に近しい幕府関係者に触れて回るという活動をした。結果的にこれは容れられず、当初の予定通り下田を開港することで決着したわけだが、この一連の出来事は象山の人的ネットワークをまとめるのにふさわしい材料であるため本論三章で詳しく見ていきたい。

また、この時期に象山は門下生の吉田松陰から、停泊中の黒船に秘密裏に乗り込みアメリカへ密航する計画を相談され、実践論を説いて計画を後押しする。当時、密航は重罪であったため吉田松陰と共にそのバックにいたことがばれた象山は捕縛され、死罪判決を受けるも、老中阿部正弘や先述の勘定奉行川路聖謨がこれほどの人物を失うのは惜しいとして寛大な処置を施し、松代藩における蟄居処分に留められた。この判決期間の獄中で書いたのが、象山の代表的な著作である『省**諐**録』である。

　松代藩蟄居後は、象山の生涯の中で江戸に行く機会はもうなかった。長い幽囚期間が経過したのち、外国との間で締結された各種条約という既成事実と、表向きは攘夷論を保っている朝廷との間を調停するため、京に登り公家を説得する役目を任じられたが、長州系の過激派の襲撃に遭い、任務半ばで不帰の客となった。

　前述の五月塾における象山の門下生であり、同時に象山の妻の兄でもある勝海舟は、その著作『氷川清話』の中で象山をこう評している。

「佐久間象山は、物識りだつたヨ。学問も博し、見識も多少持つて居たよ。しかし、どうも法螺吹きで困るよ。あんな男を実際の局に当らしたらどうだらうか……。何とも保証はできないノー」（勝海舟『氷川清話』講談社学術文庫、二〇〇〇年）

勝海舟による人物評が手厳しいことを差し引いても、象山が大言壮語の人物であったことは間違いない。『省**諐**録』の中でも、自分が時代に正当に評価されなくても将来にわたって彼自身の言論の価値が認められるはずだという趣旨の記述をはじめ、かなりの自信家ぶりを窺い知ることができる。自分の論説のロジックに自信を持つだけでなく、自分自身の才能に対する絶対的な信頼があってこそ、オランダ語学習期間の獅子奮迅ぶりに代表されるような、常人には真似できないほどの精力的な生涯を実現することができたことを垣間見ることができるだろう。

　ここまでで見てきたように、佐久間象山は幕末当時としては非常に先進的な思考をする人物だった。そして、これまで提出されてきた象山に関する研究の多くは、彼の思想遍歴を辿るものが多かったように思われる。それはある意味で当然のことで、突如日本歴史上に出現した異色の学者を研究するとあれば、その思想の形成過程を丹念に追っていくのは自然な発想だと言えるだろう。

　ただし、ここで注意を払いたいのは、佐久間象山は屋内にこもって政治批判をするタイプの学者ではなかったということだ。すなわち、彼は自身の提言を以て旧態依然とした世の中に変革をもたらしたいと本気で望んでおり、その実現のために幅広い人脈を駆使して幕政に働きかけるということを繰り返し行うタイプの学者だった。この点に関して、これまで提出されてきた研究においては象山が利用したネットワークを中心に探る試みが十分になされていたとは言い難い。そこで本稿では、行動する思想家としての象山の性格に焦点を当て、彼が幕政に建言する際に活用したネットワークを探っていきたい。

　そして、彼の人的ネットワークを明らかにするにあたっては、特に象山による『海防八策』の建言を受ける形で設立された長崎海軍伝習所と、日米和親条約締結時の下田開港案を阻止するべく、象山が東奔西走した「横浜開港問題」を取り上げたい。どちらも彼が自分の建言の実現に向けて人的ネットワークを最大限活用した好例であり、今回のテーマを考察するにふさわしい題材だと判断した。

　この一連の検証作業を通じて、これまで必ずしも十分にスポットの当てられていなかった象山の活動家としての側面を明らかにし、稀代の学者・佐久間象山の人間像とその人生を捉え直したい。

　本稿は大きく分けて序論・本論・結論の三部構成になっている。

　まず序論ではこれまでみてきた通り、本研究が行われるに至った背景、およびその研究の目的を明らかにしている。

　続く本論では、一章で象山の生涯を時期別に詳しく見ていく。さらに、二章および三章では特に『海防八策』と横浜開港問題を取り上げたい。本研究のメインとなるテーマは佐久間象山が幕政に建言する際に利用した人的ルートを明らかにする事であるから、『海防八策』を受ける形で結実した例である長崎海軍伝習所と、その建言が必ずしも同時代的に結実していない例である横浜開港問題の二例を挙げている。この両者を経緯・象山の動きの両面から見ていく事で、彼が自身の思想を反映させるためにどういったルートを利用していたのかを明らかにしたい。

　最後に結論では、本稿の内容を総括し、序論一章で取り上げた佐久間象山の一般的な認識を性格づけしなおすという試みをまとめる。

1. 佐久間象山の生涯

　本章では、佐久間象山の生涯を主に「東洋道徳、西洋芸術」思想の形成過程および海防論の形成過程という観点から見ていきたい。加えて、続く二章・三章で取り上げる『海防八策』および「横浜開港問題」の内容にも簡単に触れていきたい。

一節　江戸留学以前の象山

二節　ペリー来航前後の象山

三節　松代蟄居後の象山

二章　長崎海軍伝習所

　本章では、象山による幕政への建言が実現に至った例として『海防八策』を受ける形での長崎海軍伝習所の設立を、その建言が結実するまでの過程で辿った象山の人脈とともに見ていきたい。

一節　『海防八策』が献上された背景

二節　『海防八策』の内容と先見性

三節　『海防八策』が長崎海軍伝習所という実体に結実するに至るまでに辿った人的ルート

四節　『海防八策』に関して象山が幕政に建言する際に活用したコミュニティ

三章　横浜開港問題

　本章では、

一節　横浜開港問題の経緯

　一八五四年（安政元年）三月、前年のペリー来航を受ける形で日米和親条約を締結することとなったが、この一ヶ月ほど前の段階で、佐久間象山は日米和親条約における日本の開港場が下田と函館という案で画策されていることを知り、このうちの下田開港に反対して行動を起こし始めている。

　ここで、象山が下田開港に反対している理由は大きく分けて二つある。一つは、象山と江川太郎左衛門の間に確執があり、下田案はもともと江川太郎左衛門から出てきたものだろうと推察されることであり、もう一つは地政学的な観点から下田よりも横浜を開港する方が理にかなっていることである。

　まず、一つ目の理由から見ていきたい。そもそも、佐久間象山と江川太郎左衛門の間には長年の確執が存在し、『省**諐**録』（前掲、一九四四年）や『象山全集　下』（佐久間象山、信濃教育会、一九七五年）に収録された各種の書簡からも見られる通り、象山は江川の思想や人間性を手厳しく批判している。特にこの下田開港の文脈では、藤田東湖に宛てた手紙の中に江川を批判する内容が見て取れる。

「昨夕罷還長岡藩衆に面會承候へば下田の儀は兼て愚察の通果して江川氏より出候に相違無之と申事に候。此人一人の爲には一時の巧策とも可申候へども皇國の御爲には千載の失計に歸し申候。我攻守に不便に候地へ敵を引き入れ候はんは三尺の童子も猶其害を知り候事に御座候。然るを此人好んで此計を進めしは例の卑に依て高を成さんと欲する陋見たり。自分の管轄候處の地にして彼の陸行不便の絶地なるを幸とし洋人の學術技藝をも外手にしらせず吾手にて獨り先づ學び得候はんと企候事と被察候。誠に惡むべき私計と存申候」（『象山全集　下』前掲、一九七五年）

　藤田東湖に手紙を書いた前日の夕方、長岡藩の者から聞いたところによると、下田開港案はもともと象山が想像していた通り江川太郎左衛門から出てきたものでまちがいないとのことで、江川自身の管轄地である下田を開港地にすることで西洋の技術を自分一人で学び取ってしまおうという極めて勝手な方策だと批判している。象山の江川嫌いはこのタイミングで始まったものではないので、両人間に確執が生じるに至った経緯については本章二節で時系列順に考察していきたい。

　さて、ここで、この部分のロジックを見ておきたい。すなわち、攻めるにも守るにも不便な土地に敵を招き入れるのは誰が見ても危険であるのに、そうした土地にあたる下田が辺境かつ自分の管轄地域であるのをいいことに、西洋の技術を独り占めにして名声を高めようとするのは傲慢だ、という江川批判である。この、「攻めるにも守るにも不便な土地」という表現に関して、具体的に下田のどういう点が攻守共に不便であるのかという疑問が次の、安全保障の観点に即した、象山による下田開港反対論につながってくる。

　こうした理由から象山は反対したものの、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

二節　象山と江川太郎左衛門との間における確執について

三節　横浜開港問題に関して象山が幕政に建言する際に活用したコミュニティ

結論